

# 登校拒否（不登校）に関する臨床心理学的研究（Ⅱ）

～スクールカウンセリングにおける事例を通して～

Clinical Psychology Research on School Refusal (II)

～A Study of School Refusal Cases in School Counseling～

久留 一郎\*・小田 奈緒美\*\*・森岡 玲子\*\*・新屋敷 敏恵\*\*

Ichiro HISADOME・Naomi ODA・Reiko MORIOKA・Toshie SHINYASHIKI

キーワード：「登校拒否」「自我関与」「自我形成」「家族病理」「家庭・学校との連携」

## はじめに

登校拒否（不登校）は、学校臨床に携わるなかで避けておれない問題である。特に中学校においては、生徒指導における中心的課題の一つとして位置付けられている。そのためスクールカウンセラー（以下SC）への登校拒否（不登校）の問題に対する関わりへの期待も大きい。

平成14年度の文部科学省の調査によると、年間30日以上欠席者数が前年度より減少していると報告されたが、単なる欠席日数だけでは登校拒否（不登校）の複雑で多様な問題は語りきれない。そこには登校拒否（不登校）という症状を呈している児童生徒自身の生きる意味に関わる問題が存在しており、これらの背景には、学校、家族などの病理構造の存在が臨床家らによって指摘されている。

## I 問題

1960年代以降の高度経済成長によって日本の社会状況は一変した。それにともない学校状況、家庭状況もまた大きく変化した。学校では個性的で、感性豊かな子どもよりも、高い偏差値をもつ子どもを作り出すことに力が注がれ、家庭においてもいい学校、いい会社に入ることが人生における重大事のような風潮が生れた。そのような状況の中で、登校拒否（不登校）の子どもたちが増え始め、「知的レベルでは有能と思われる若者に、

ブレイク・ダウン（挫折）現象が社会現象として現われ始めた」（久留、2003）。

### ①「登校拒否」概念の歴史

登校拒否は1941年、Johnson, A.M. らによって学校恐怖症として最初に報告された。わが国においては、1950年代後半から1960年代にかけての高木、鷺見らの先駆的な業績以来、近年においてもなおその増加傾向が指摘されている。

これまで「登校拒否」が疾病として一臨床単位を構成するものであるか否かに関しては、多くの議論が交わされてきた。臨床家の間では、「登校拒否」に対する症候群的な把握と一臨床単位の経過像観察的な見方とが混在しているように見える（清水ら、1991）。

登校拒否という現象は極めて社会的な現象であり、社会の時代的変遷と共に大きな影響を受けていると考えられる（本城ら、1987）。

登校拒否をめぐる論議は米国では終了し、いまやわが国で主に追求される時代となっている。

ここにもわが国独特の心理・社会的背景が存在しているように思われる。

### ②登校拒否（不登校）とは

現代における登校拒否（不登校）について久留ら（1994）は、「単なる不登校や学校ぎらいとは異なる存在」であり、だれよりも学校状況に対して高い関心を抱いている（過度の自我関与状況）。その背景には家族状況、自己概念のありよう、自我状況などの心理・社会的状況が影響していると述べている。登校拒否（不登校）の子どもたちは「過保護、過干渉あるいは拒否的、溺愛的親子関係の中で、目に見えないハンディキャップ

\* 鹿児島大学教育学部障害児教育学科

\*\* 同上 教育学部附属教育実践総合センター  
研究協力員

を背負いながら、加齢のステップを踏むことになる」(久留、2003)。そのような状況の中で彼らの自我は脆くて傷つきやすい心理構造を持つこととなり、「中には、幼児期から児童期になっても、親や教師の評価基準に自我がふりまわされ、真の自己の確立に至らない状況のまま、『よい子』として、『ロボット人間』として思春期へ向かう場合もある」(久留、2003)。彼らは真に確立された現実の自己像を持つことができず、親や教師の価値基準にはめられた理想の自己像のなかで生きていくこととなる。この現実の自己像と理想の自己像とのギャップが大きいとき、自己内に葛藤が生じ、その結果として登校拒否(不登校)という症状を呈するものと臨床的には理解できる。

### ③スクールカウンセラー(S C)とは

登校拒否(不登校)、いじめ、非行、学級崩壊など、児童生徒を取り巻く状況に対し、「専門家の援助を求める要請が教員の立場からも保護者からもあがってきていた」(村山ら、2002)。その声に応え、平成7年度より、文部省(現文部科学省)によってS C活用調査研究委託事業が始められ、平成13年度からはS C活用事業補助として新たにスタートしている。

S Cに求められる専門業務は「狭義の心理臨床の専門性にとどまらず」(大塚、2002)、学校における教育活動の実情についても十分に理解したうえで活動でなければならない。それは学校という日常性の高い状況の中で、いかに非日常的(心理臨床的)視点を持って関わっていくのかということでもある。

平成14年度までに、全国で5,500名のS Cが派遣されており、現在も拡大している。そのような中で、S Cの質の向上、スーパーヴァイザー制度の充実などの課題もでてきている。

臨床的に、登校拒否(不登校)の背景には様々な要因が深く影響し合っているとされており、S C自身の発達観・教育観・治療観のありようが問われている。

以上のことから本論文では、スクールカウンセリングにおいて、S Cが人間学的心理療法の立場

からかかわった登校拒否(不登校)の3事例を通して自我関与、自我形成、家族病理のありように視点をあてて検討していく。さらに、登校拒否(不登校)に苦悩するクライアント(以下C 1.)への関わりを振り返る中で、今後S Cとしてどのようにあるべきか、家庭・学校との連携を含めた臨床援助のありようについて深めていきたい。

## II 事例

### 事例1 「固い心の扉を開いていった少女」

～対人関係における自我関与に視点をあてて～

<対象者>

Yさん： 中学2年生女子。保健室登校中。

<家族構成>

父(単身赴任中)。母・姉と三人暮らし。

母親は本人の決めることにあまり口出しせず、養護教諭と本人に任せて、早く教室に戻れたらいいと感じている様子。

<保健室登校に至るまでの経緯>

成績優秀で陸上部に所属、友人との関係も問題なく明るく元気に過ごしていた。中学1年の終わり頃、Yさんの悪口を書いた手紙を仲のよかった友人たちから渡される。それを読んで、友人に対する不信感がつり、保健室にのみ通うようになる。

<学校の対応>

養護教諭が中心となり、担任と密に連携をとりながら、教室に自ら戻る日が来るまで積極的に待つ姿勢で向き合っていた。

<過程>

養護教諭の方から、Yさんのこれまでの経緯の説明と、依頼があり、S Cが週一回訪問時に、Yさんと可能な限り関わるようにした。

Yさんと初めて会った際、不信感、猜疑心が非常に強く、傷つけられた心を、誰にも触れさせまいとする防壁を感じた。そのため、核心には一度も触れず、治療契約も厳密には結ばずに、一年間さりげなく関わった事例である。S Cは、人間学的心理療法の立場からYさんにかかわった。

以下、四期に分けて経過を述べる。

(第1期)

「城壁を巡らし、防衛・守りの時期」

保健室利用者の出入りが多い中、沈黙し、視線を合わせない。誰にも触れさせず、自分からも触れないという感じで保健室にいた時期。気丈な印象を表には見せているものの、周りの目に対する自我関与の高さのほうがわかれた。

養護教諭に対する信頼は厚く、よく手伝い、話をする。それ以外の人に対しては距離をおいている印象。登下校の際は、人目を避け、他の生徒と時間が重ならないよう保健室のドアから出入りしていた。給食も断り、母親の作った弁当を持参し、カーテンを閉めて一人で食事を済ませている(養護教諭は教員と共に職員室で給食)。保健室においてYさんは、養護教諭の代理・補佐役を器用にこなし、臨機応変に対応していた。Yさんにとって、養護教諭に任された役割は、保健室で過ごす上で気持ちを楽しみ、自分なりに学校生活に参加し、役に立てているという満足感へとつながっていたように思う。表には見えにくいですが、友人に自尊心を傷つけられたことを決して許せないYさんの頑なさ、痛みの深さを強く感じた。

SCのうごきとしては、Yさんの引いた他者との一線を大切にし、防壁の外でYさんからよく見える位置に立つように心がけた。直接Yさんに関わることはせず、Yさんの胸の内にある深い痛みをみつめながら、心でそっと寄り添うような距離を保った。

ほとんど会話を交わすこともなく、同じ空間にはいるけれども、Yさんだけの見えない個室があり、そこから出入りしているような雰囲気を感じた時期でもある。

(第2期)

「少しずつ、心の扉を開き始める時期」

養護教諭を介して三人で話すことは何度かあったが、Yさんの緊張、守りは続いていた。ある日養護教諭が席を外してYさんと二人きりになった。沈黙が続き、座る位置に対しても強い自我関与を示したため、SCが程良い距離に座り直しYさんが心理的に楽になれるよう配慮したところ、Yさんから視線を向け、一つ二つ話しかけてくる。初めて二人でのやりとりをもつことができ

た。

相手が自分の領域を脅かさないか、勝手に踏み込んで来ないかと過敏にセンサーを張り巡らせていたYさんが、固く閉ざしていた心の扉をSCに対してほんの少し開いてくれたように感じた。それ以降、沈黙の重みが以前に比べて軽くなり、二人で居る緊張感、閉塞感がゆっくと薄れていった。

この時期に感じたことは、これまで触れずに見守ろうと心に向き合っていたSCのうごきが、Yさんにとっては、視線を合わせることでできない、見えない威圧感となっていたのではないかと思えた。SCの方から、Yさんにわかりやすく見える形で程良い距離を示したとき、初めてSC自身を一人の人間として、深く見つめてもらえたような気がした。ぎこちなくお互いを探り合っていたこれまでの関係から、二人がようやく顔を見合わせる時期へと動き始めたように思う。

(第3期)

「心の扉を開放し、かかわりを楽しむ時期」

守りの壁が和らぎ始め、話せる友人と休み時間を保健室で過ごせるようになる。この頃からSCが来校する時間を待って、保健室の中から手を振り、出迎えるようになる。友人が保健室に来る度にSCを紹介し、一緒に会話を楽しむようになる時期。養護教諭の方より、普段SCの話題があがるようになり、会って話すことを楽しみにしている様子とのこと。Yさんの本来もっている積極的な面や明るさが、前面に見え始める。

雑談する中で、家庭で起こった出来事、養護教諭や友人の近況、家族に対する不満など、Yさんの方から自発的に語るようになる。傷ついた部分のみにとらわれ、接触を閉ざしていた時とは違い、それを抱えながらも外と関わろうとするエネルギーが解放され、豊かに広がりつつあるのを感じる。

この時期、母親との葛藤が多く語られる。登校させようとするいろいろな手でYさんに制限を加える母親に対して、断固として自分のやり方を曲げない強い一面と共に、気持ちをなかなか受けとめてもらえない寂しさも時折語られる。

SCとしては、Yさんが、おおらかに自由に、

人とのつながりをもう一度築き直そうとするうごきを共に楽しみながら、一方で、母親に対して揺れ動く微妙なYさんの心を見守るよう心がけた。Yさんは、SCと共に同じ世界を共有し、わき起こってくる思いを自由に、感じるままに表現しながら、抱えているさまざまな思いを吐き出し、ゆっくりと心の整理をしていった時期であった。

#### (第4期)

##### 「未来へ、外の世界へ踏み出していく時期」

友人との交流の機会も増え、集団行事では養護教諭と一緒に参加見学ができるようになる。三学期も終わりに近づき、来年からの自分自身のあり方について自ら考え始める。

Yさんは、「来年も今の状況が続く見通しがあればこのままでいたい。でも養護教諭やSCが異動になったらどうしよう。」と不安や心配な思いを表明する。また一方では、養護教諭もSCもこの中学校を3月で卒業するのなら、自分も保健室登校から卒業する時期なのかもしれないとも語る。受験もあり、夢もできたので、3年生になったら教室に入ってみようという気持ちがわいてきていることをSCへ伝えてくる。

SCからは、Yさんに次のようなことを伝えた。今まで一度も不登校になるきっかけに触れなかったが、Yさんなら自分で抱え、整理し、越えていくと信じて一年間見守ったこと。これから先も、Yさん自身が自己決定し、進んでいけると信頼していること。まだ完全に癒されていない心も感じるので、焦らずゆっくり癒してほしいことを伝えた。

養護教諭と担任に対しても、Yさんは自分で意向を伝える。その結果、来年のサポート体制を学校全体で話し合ってくれることになった。

Yさんは自ら未来に目を向け、これまで安住していた地を卒業し、これからへと一步を踏み出す決意を固めていった。友人によって傷つけられた痛みを、再び信頼できる人間関係の中で少しずつ癒しながら、自ら選んだ道へと歩を進めていったように感じた。

##### <その後>

養護教諭・SC共に3月で異動となる。養護教諭から連絡があり、3年生になり元気に登校して

いる。時折、Yさんと連絡をとって話をしたり、メールをしたりしながら様子を見守っているとのこと。養護教諭の報告から、友人とぶつかった時など、自信を揺るがされて不安定になることもあるようだが、関係を避けずに向き合おうとしているYさんの強さを感じる。今後も家族、友人、先生に支えられ、Yさんなりに乗り越えていけるだろうと感じた。

##### <まとめ>

友人関係の中で傷つき、高い自我関与を示していたYさんは、信頼できる人との出会いを通して、再び人間関係を築き直し、保健室登校からの卒業という形で人の輪へと戻っていった。Yさんが呈した言動の意味をみると、その根底には、今まで経験したことのない心の痛みに遭遇したとき、不安定で傷つきやすい自我のもろさ、対人関係における敏感さが見え隠れしていた。母親との葛藤が表現されていることから、家族病理からくる自我形成における問題も隠れていたように思う。Yさんは、養護教諭、担任、SCとの一年間の関わりを通して、自我のもろさを抱えながらも、それをさらなるしなやかさへと変容していきような、自我の再体制化が促されていたように思われる。また同時に3月の転機がその熟した時期とも重なり、Yさんの背中を押すきっかけになったのではないだろうか。

本事例は、SCとして、これまで関わった中で、核心に全く触れず、Yさんの自己治癒力を信じてただ側に居続けたものであった。非常に日常場面に近い状況でかわりをもちながら、非日常の治療構造をSCの中に持ち続けることのあいまいさの中で、時にはSC自身揺れうごくこともあった。しかし、CI.によっては、日常と非日常の狭間でより身近に寄り添い、一人の大人のモデルとして、自分らしさをにじませたSCと向き合うことも、治療的に意味があるということ、今回のケースを通して感じた。

今回、養護教諭が影の柱となりYさんを取り巻く家族、担任、友人へとかかわりながら、Yさんと深い信頼関係を築き、ずっと寄り添い続けていたことが、SCにとって何より大きな助けとなった。学校側も養護教諭を通して共通理解しながら

連携し、担任を中心に心強い後ろ盾としてYさんの変化を見守ってくれた。この体制によりSC自身も、Yさんと安心して柔軟に向き合うことができた。

残された課題としては、進学・就職など、新しい局面での人間関係がYさんを不安定にする可能性が考えられ、節目ごとのサポートが今後も必要なケースだと考える。自我関与状況に応じて柔軟に対処し、自分自身を守るしなやかさがYさんの中に育まれていくこと、人間関係における自信につながるような経験を積み重ねていくことが、Yさんにとって何より大切だと考える。

## 事例2 「あるがままの自分を探して」

### ～自我形成の視点から～

#### <対象者>

Aさん 中学3年生 女子

性格はまじめ。芯が強い反面、「頭が堅い」ところがある。ささいな事で自信をなくし落ち込んでしまう。対人関係に敏感で、適切な距離のとり方が苦手。思いつめると大胆な行動をとり周囲を驚かせることがある。

#### <家族構成>

30代の両親、小4の妹の4人家族。同じ敷地内に母方祖母が住んでおり、インターフォンでつながっている。

父親はPTA役員。まじめで堅い。場をわきまえず生真面目に正論を語るようなところがある。家庭では義母にとっても気を使い、よい婿としてがんばっている。

母親はとてもおとなしく、引っ込み思案。自分の意見や気持ちをあまり表明しない。母親というよりも娘的なアイデンティティ。

祖母は元教育関係者。地域のオピニオンリーダー的な存在。

#### <方法>

相談室にて、担任、生徒指導主任をはじめAさんへ関わっているキーパーソンへの個別面接を中心に関わった。その際、Aさんの表面上の行動についてだけでなく、内面世界の理解への助けになるようSCとしての“みたて”を伝え、その後の対応のあり方についても話し合った。また、Aさ

んの家族のありようなどについても触れ、Aさんを取り巻く世界への理解が深まるように関わった。

Aさんについては、本人の希望がある場合のみ個別面接を行った。

SCとしては、Aさん自身の自我形成への援助を中心的課題に据えながら、Aさんの世界がさらに広がっていくことを大切にしたい。またAさんと彼女を取り巻く家族、学校などがよりよい形でつながると同時に、ともに成長し、それぞれが自己実現的に変容していけるような支援を心がけた。

#### <結果>

### 第1期 とまどいの時期

#### 「過去へのとらわれと現実への批判」

生徒指導主任より「3年生の女子生徒に友人関係がうまくいかず、マイナス思考の子がいる。このままいくと不登校になるのではないか？」と相談を受けた。またAさんの友人とのちょっとした行き違いについて保護者から「相手の子へ注意して欲しい」と電話での申し入れがあることなど、家庭からの要望に対する学校側の戸惑いについても打ち明けられた。SCは生徒指導主任の心配と戸惑いを受け止めつつ、Aさんのありよう、抱えている課題は何なのか？保護者のありよう、家族関係など、Aさんを取り巻く世界について立体的に把握するような視点が必要ではないかと伝えた。

#### #1 (担任の勧めでAさんが相談室を訪れる)

主訴：友人関係がうまくいかず、自分に自信がない。精神科でカウンセリングを受けたい。

小学校高学年のとき、同じクラスの男子とのトラブルを契機に、周囲からのからかいの対象となり、以来「うまく自分を出せなくなってしまった」。中学入学後、何とかやってきたが、3年になってから同じクラスの女子とうまくいかなかった。「毎日が苦痛。家へ帰るとぐったりする」「努力しているつもりだが、うまくいかない。どうしたらいいかわからない」。弁論大会で今のこの気持ちについて話したが、伝わらなかったと語る。SCとしては、Aさんの辛い気持ちに共感しつつ寄り添うことに徹した。

面接後、担任の方から、同級生達がAさんとの

関わりに戸惑っていること、さらにAさんと同級生との間にはさまり担任として困っていることを語られる。担任の苦しい状況を受け止めつつ、友人関係のトラブルという目先の問題だけでなく、Aさんの内面の成長という視点も持ちつつ関わっていくことの大切さについて伝えた。

この頃から徐々にAさんの欠席が目立ち始める。登校しても校内に入れず泣き出し、母親が連れ帰ることもあった。学校は努力しているにもかかわらずどうしてもこのような状況が起こるのかという疑問、現状に対する受身的な保護者の対応、学校への尽きない要望、時に一転して批判へと態度が変わる保護者のありようなどに、直接対応していた担任、生徒指導主任のなかに「Aさん自身の努力が足りないのでは？」との気持ちが沸き起こってきた。SCより、Aさん自身や家族を責めても何も変わらないこと、むしろ変わりたいのに変われない弱さやもどかしさ、辛さに寄り添うことの大切さを伝えるとともに、保護者の怒り、悲しみ、辛さにもより沿う気持ちで支援していくことの必要性を伝えた。

## #2 (本人の希望により母親と一緒に面接)

前回の面接後、これまでの出来事を振り返り辛くなった。人に迷惑をかけたくない。元に戻るのには時間がかかると思うので、まずは保健室登校から始めたいと語る。さらに母親に対して、年の離れた家族のアイドル的存在である妹への嫉妬の気持ち、今まで我慢してきたことなどについて自ら伝えた。SCからは、Aさんのがんばりたい気持ちは大切だと思う。無理をせずに、Aさんなりのペースを大切に伝える。

## 第2期 混乱の時期

### 「よい子でいつづけることの苦しみ」

生徒指導主任が、保健室でのAさんの様子について折に触れ語る。Aさんは養護教諭にひたすら話しつつづけている。養護教諭は「自分の気持ちを分かって欲しいという強い気持ちを感じる」と語る。保健室登校から1週間後、これ以上父親に迷惑をかけられないので「明日から教室に行く」と宣言。その後、音楽や体育など参加しづらい授業に関しては保健室で過ごし、それ以外の時間は教室で授業に参加している。髪を切り、スカートも

少し短めにし、見た目は活発な感じとなる。この頃、担任に対してわがままを言ったり、へりくつを言うなどの様子が見られる。また、日々のちょっとした出来事で落ち込んで泣き出したり、欠席するなどの様子が見られた。

SCは担任や生徒指導主任などキーパーソンへの面接を中心に関わりを続けた。SCからみてAさんの様子は、祖母や両親が理想としている姿に合わせようとして無理をしているように感じていた。それに対して学校側は表面上、多少わがままにしろ、元気にしている様子に問題解決という思いを抱いているようであった。そのため担任や生徒指導主任に対しては、表面的な部分だけでなくAさんの内面世界を理解していくことの大切さについて繰り返し伝えた。

## 第3期 模索の時期

「よい子からの脱出。あるがままの自分を探して」

夏休みが明けるところから食べ物や喉を通らず吐いてしまう状態が続く。9月1日はやつれた様子で登校。生徒指導主任が「きつかったらすぐに言いなさい」と声をかけるものの、その日はがんばり通す。翌日、4時間目に泣き出し、ずっとうつむいて座っていた。給食時間に、トイレに鍵をかけ閉じこもり泣いているところを見つけられ、保健室へ。先生方がゆっくりと話を聞くことによって落ち着きを取り戻した。このころ軽い自傷行為が見られた。同日夜、祖母が校長宅へ電話をかけた。校長が不在だったため、すぐに教頭宅へ電話をかけ、1時間以上学校の対応に対する不満、批判をまくし立てた。教頭先生はSCに「こんなに悪い状況になるとは思わなかった」と驚きと戸惑いを表明され、さらに「電話してくるのが両親だったらまだましなのだが…」とAさんの家族状況の複雑さについて打ち明けられた。電話の件以後、両親から転校の申し出があったが、校長よりそれでは解決にならないこと、学校側も努力することなどを伝えるとともに、精神科クリニックや心理相談室などへの相談を勧めた。祖母が中心となり、いくつかの相談機関に母親とAさんを連れ回ったようだが、Aさんの希望によりSCが定期的に面接することとなる。

#3 夏休みに家族4人でキャンプに行き楽しかった。しかし今は、親にも気を使ってしまって安らげない。教室の雰囲気怖い。高校へは行きたくないが、行かなくてはならないだろう、塾には毎日行っているが、きつくなってきたと複雑な心境を語る。

#4 保健室登校中。まもなく体育大会がある。個人種目は出たいが、団体種目は無理だと思う。わがままと思われるのではないかと気にしている様子であった。参加種目決めについて保健室でクラスの女子と話ができてうれしかったと話す。また、嫌なことやイライラしたりすることは誰にも言えないので、独り言でブツブツとつぶやいていると打ち明けてくれる。

#5 体育大会には出るつもり。学生時代の父と同じように自分も走るのが得意だ。それで毎日得意な短距離走の練習をしている。時々、人の目が気になるが、がんばりたいと語る。

SCはAさんがよい子の枠組みから自分らしい「あるがままの自分」へと変わろうともがいてるように感じた。同時に家族の期待に背き、よい子をやめることへの怖さも感じた。Aさん自身も少しずつきづき始めているようであり、そのことを家族に対して、様々な形でサインを送っていたが、家族のきづきは感じられなかった。

後日、生徒指導主任よりAさんが体育大会に参加し、新記録を作ったこと。そのことが自信になったのか、再び教室に戻りがんばっていることなどの朗報を聞く。また、以前より父親の雰囲気が柔らかくなり、Aさんの父親としての責任を果たそうとしている姿についても触れられた。

学校側より今はよい方向に向かっているの、個別面接について終了したいとの申し入れがあったので、SCとしては心配もあったが、Aさん自身の力を信じ、少し離れたところから見守る事とする。またAさんより希望があるときにはいつでも個別面接に応じる用意のあることを伝える。その後Aさんは何かトラブルのあるたび泣いたり、不安定になるものの、周囲の支えによって何とか乗り越えながら卒業していった。

<まとめ>

このケースはAさんの自我の弱さ、自我形成の

問題と同時に「よい子」「よい家族」という理想(あらねばならない姿)に縛られて苦しんでいる家族病理が中心となると思われる。さらにその背景にはグレートマザー的な祖母の存在が大きく影響を与えている。祖母は、両親のAさんへの関わりに満足できず、自分自身が前面に出てきて周囲をかき乱し操作しようとしていた。

そのような家族状況の中で、Aさんは妹が生まれるまで家族の中心として甘やかされ、家族の期待を背負ってきた。妹の誕生により家族のアイドルの座を奪われたAさんにとっては、「よい子」でいることが自分自身の存在を認められる唯一の手段だったと思われる。また祖母の存在は、父親をAさんの父親というより、「よき婿」としてのアイデンティティで行動させ、母親をAさんの母親ではなく、祖母の「よき娘」として行動させているようであった。それはまるで祖母にとっての「よい子」としての生き方とでも言えるようなものであった。Aさんを含めた家族それぞれが「あるがままの自分」を模索しているようであった。SCとしてはこのような背景についても視野に入れながら対応していこうとした。しかしAさんの家族、学校の問題状況の受け止めは、「学校を休んだ」「友達に何か言われて泣いていた」など、Aさんの表面上の問題にとらわれていた。このズレをなんとか寄りあわせしようとしたがSCの力不足でそこまで至らなかった。しかし、そのような中で、AさんとAさんの父親は自分自身の「生きる意味」を探し始めている。

今回はAさん自身の持っている力、Aさんを取り巻く人々の優しく温かい支えによって、表面上は落ちついたように見える。しかし本当の意味での解決には至っていない。むしろAさんの示した行動がこれまでの家族構造、家族の生き方への問題提起となり、本当の解決に向けてのスタートに立ったところだと思われる。

スクールカウンセリングにおいてSCのみだと当事者それぞれの問題意識にズレが生じることは多い。また学校という場は時間によって機械的に区切られてしまう。限られた時間のなかでどのようなことができるのかということは、SCに常につきつけられる課題である。

事例3 「新しい種を自分で蒔いたI君」  
～家族病理に視点をあてて～

〈対象者〉

I君 中学1年生 男子

〈家族について〉

父、母、姉の4人家族。

母親は、I君が小学1年・5年時に大病を患い長期の入院と大手術をしている。面接時の様子は血色が悪くやつれた感じで、時にせきこみ、会話が長く続けられないこともあった。完全な健康体とはいえない状態がうかがえた。もともとはおおざっぱな性格だったという。

父親は、会社員。I君が6年時に大病し、緊急手術で命はとりとめたものの、現在も身体障害・言語障害の後遺症があり、自宅療養中である。働き者の社交家だったが、病後家に閉じこもりがちになった。面接時の様子は、言語表現が思うようにならず、とりつくろうように笑顔を浮かべていたが、自宅では感情のコントロールが悪く、爆発的に怒ったり反対に抑うつ的になったりすることだった。

姉は独立しており、父方祖母が同一敷地内に住んでいる。

〈生育歴〉

姉と年が離れているため、一人っ子のように育った。幼少期から、おとなしく、やさしい性格で友人との間ではひっこみ思案な面がみられたという。反抗期と感ずる時期もなく、母親の手を煩わせない子どもであった。

小学校5年で登校しづりが始まるまでは、学習・運動面とも「ふつう」であり、母親から見て特に気がかりな点はなかったとのことである。

小学1年時、母親の入院治療と回復までの間、父方祖母に預けられ育てられた。その間、I君は一度も見舞いに来たことがなかったという。父親の入院の際にも同様であったが、どんなに説得されても、療養中の親には面会しなかった。退院してきた母親に対しては、体を思いやり、わがままや男の子らしい乱暴さもなく、手伝いをよくして心配をかけない「とてもよい子」であった。また、ひょうきんに振る舞いよく家族を笑わせていたとのことであった。SCには、I君は内

面世界の繊細さや過敏さにより、家族の状況を敏感にキャッチし、心配をかけないよい子であろうとしてきたように感じられた。

〈母親面接が始まるまでの様子〉

小学5年生から登校をしづる現象がみられた。集団場面で、吃音を笑われたことがきっかけになったのではと、後に母親が想起している。6年生になり登校直前になると腹痛、嘔吐、発熱がみられ、登校するのに強く抵抗を示し始めた。小学校の先生が朝迎えに訪問すると、体を固くし汗をびっしょりかいていたが、それでも、無理やり引きずって登校させていた。家の中では母親にくっついて離れようとしなくなった。中学校になり入学式には遅れて出席したものの、その後完全に不登校状態となった。母親は毎日「学校に行きなさい」と追い立て責めているとのことだった。

以上のことより、母親に対して、I君の内面世界の理解と家族の絆づくり（I君の安心感の基盤を育むことと母親としての役割へのきづき）を目標に人間学的心理療法の立場からカウンセリングを行った。方法としては、母親面接をおよそ月1回のペースで行い、I君へは母親を介してメッセージを伝える形で間接的に関わった。母親面接の後担任（20歳代・男性）へ、I君の様子やSCからのみたてを伝え、担任からは家庭訪問時の様子を聞くなど連携を図った。

〈経過〉

\* 「 」内は母親の、『 』内はSCの言葉

**第1期：厳冬・閉じこもりの時期**

母親は、毎晩毎朝「学校へ行きなさい」と言い続け、毎日が地獄のようだと語る。また、世間への引け目を感じるといい、義母からのやんわりとした批判に耐え忍んでいる嫁としての辛さも話される。「親子ともども引きこもりである」と弱々しく無表情で話す姿には、疲労感や悲しみが感じられる。『I君のところが元気になるように一緒に考えていきましょう』と声をかけると、ほっとした笑顔がみられる。I君へは、簡単な自己紹介や身の周りの出来事（主に海山や草花などの自然の様子）を書いたメッセージを母親に託した。母親へは『I君は本当は人一倍両親に迷惑や心配を



かけたくない子では?』となげかけ、I君の内面世界への理解を促したが、「どうやったら学校に行くか」という表面的な問題行動(登校拒否)の解決方法を探っている時期であった。I君は、月曜日から金曜日まで緊張した様子で過ごし、金曜日の夜になるとホッとため息をつく。家庭内から外に出ることはなく、ほとんどテレビやゲームで一日を過ごしている。母親と一緒に入浴したがるなど、母子間の共生関係がみられた。

学級担任の家庭訪問では、母親は「喜んでいたように見えた」と言うものの、担任の観察によると吃音が増え表情はこわばっていたとのことだった。対人緊張・不安の高さとは裏腹に、自分の気持ちを抑え相手に不快感を与えないように頑張るI君の姿を感じ、母親・担任にみたてを伝えた。

### 第2-①期：春の兆し・開墾の時期

母親は、I君の欠席が増え始めた頃の様子を振り返り、I君が「何に傷ついていたのか考えるようになった」と話し、「引きずって行かせていた頃はかわいそうなことをした」と次第にI君の内面世界へ目が向き始めたことがうかがえた。「家庭でともに過ごす時間が、以前ほど苦痛ではなくなった」と話す。また、親自身の問題として「病気の再発の不安に苛まれている」ことを話す。家の中には空虚感が漂い、両親ともに自分自身のことと精一杯な様子が伝わってくる。この頃I君は、小学生の頃の成績表や文集を持ち出し「僕はこんなこともできていたんだね」と言い、しきりに母親と一緒に何度も見たがった。母親との繋がりを求め、時間を取り戻したいというI君の思いが感じられた。

また、「痩せたい」と室内でできる運動を始め、夜間や日曜日(学校が機能していない時間帯)の活動が増えた。学級担任とは、軽い運動やプリント学習の交換を行うようになった。関係のもち方は受動的であり、自己表明も少ないが、書いた文字の筆圧は強く堂々としたものであった。

### 第2-②期

庭木の手入れ中に誤ってI君の小学校入学時の記念樹が伐採されてしまう。それを見て言った「僕みたいだ」のI君のひとことが母親の心に強く響いたと報告する。I君へ『根っこが残ってい

たら、わき芽が出てきてもっと大きい木になる』というメッセージをSCより伝える。

この後から母親は、「Iは、家庭が暗くならないようにひょうきんに振舞ってたんじゃないかと思う。無理をして私たちを笑わせていたのでは。」と語る。また母親自身の喪失体験とI君の姿を重ね合わせ「母親が死んでしまうのではないかという恐怖感は私もよくわかる。Iも同じだったろう。」と話し、次第にI君のあり方や不安にきづきがみられる。また親自身の自己否定的生き方(病弱ゆえのひげめや未来への希望のなさ)について触れ始めた時期でもあった。この頃I君は両親との会話が増え、時にやさしい口調で反抗的な言い方をするようになる。しかし、父親の体調不良に不安がり「自分が休んでいるせいでは?」と高い自責感がうかがえる。

担任とは、学習課題や運動を通して交流が続いた。途中、担任の焦りからフリースクールを薦めたがI君は「僕は学校へ行けるようになりたいんだ」としっかり伝える。

### 第3期：春・種まきの時期

母親は父親を誘い、3人で車で外出したり、地域の行事に参加するようになる。「今まで親失格でした」と言う。また「Iにはどんな道が合っているのかを考えるようになった。」と話す。「父親の(後遺症としての)感情起伏はあるけれども、家が明るくなってきたように思う」と述べる。血色がもどり、明るい表情である。

この時期から、I君は、プランターに野菜や花を種から蒔いて育て始める。SCには、既成の記念樹に替わり、自分らしく育つ「新しい種」を蒔いているように感じられる。これまでの作られた生き方から脱し、新たなスタートを切ろうという決意の姿に思われる。日常生活においては、行事の中で出会った人々と会話をするようになり、次第に母親にくっついてまわることが減り、一人で留守番ができるようになる。訪ねてきた友人数人と家の外でキャッチボールを始めたたり休み中には担任、友人と野外活動に参加できるようになる。休み明け、保健室等を利用して登校できるようになった。自己選択的・自己決定的言動が見られ、心的エネルギーが蓄えられ外の世界へ向かい

始めているように感じられる。

〈まとめ〉

未来を悲観的に捉え、現実の生きる意味を見失っていた母親にとっては、I君の姿はあれども見えず、I君の心の叫び声は発せども届かず、であったのではないだろうか。誰よりも依存したい存在である母親からの愛情によって満たされることなく、失う恐れを抱きながら、ひとりて頑張ることにより受け入れてもらおうとしたI君の姿が浮かび上がってくる。両親の病気による不安定な家族構造のもとでは、安定した、たくましい自我の発達を支えるものが希薄であったように感じられる。また、友人との関係からは、敏感さや傷つきやすさ（自我のもろさ）を抱えていたことがうかがえる。

カウンセリングを通して、母親は次第に安定し、不安の高い依存的な状態から「穏やかであたたかい母の姿」へと変化していったように思う。

その変化とともにI君も、家庭の中に安心し自分らしくいられる土壌～家族という基盤～を得て、再び外界への一步を踏み出す力を育てていったように思われる。

加えて、今回、学級担任の存在も大きな役割を果たした。教師としての真摯な姿勢でSCとの協力体制を積極的に活かし、I君の前に、等身大の一人の人間として立ち続けた姿は今後青年期を迎えるI君にとって、よいモデルとなっていくのではないかと感じられた。

スクールカウンセリングにおいて、登校拒否のC1への直接的援助が困難なケースは多い。本事例でも、直接面接が出来ないもどかしさを感じていた。このような状況の中で、母親や担任の話から伝わってくるI君像をいかに、担任や母親、ひいてはI君へ正確に反射していくかがSCの課題であった。

家庭や学校が潜在的にもつ、子どもの成長発達を促す力を信頼して関わり、繋がり続けそれぞれの橋渡しをしていくこともSCの大切な役割であるように思う。今後は、学校生活の中で新たに経験する対人関係の中での付き合いが、I君にとっての課題となってくるであろうと思われる。I君への直接的援助の導入時期を検討し、I君が自ら

のりこえていけるよう見守っていきたいと思う。

### Ⅲ 考 察

事例全体を通して、登校拒否（不登校）の背景には家庭状況や自我形成のありようなど様々な要因が絡み合い、複雑に影響し合っていることがうかがえた。根となる家族、幹をなす自我の発達のありようは、一人の人間としてC1.が成長発達していく上で、切っても切り離せない関係にある。表に見える症状はその枝葉の一部であるとも言えよう。

登校拒否（不登校）に悩む人間は、自己否定的・自己不一致の生き方を強いられ、真の自分の人生を歩むことが困難な状況に身をおかされている。事例2、事例3においては、いずれもその家族のかたちに合わせて「よい子」として生きる子どもの姿が浮き彫りにされ、家族における自分らしさの確立がテーマだった。

また、本論文では多くは語られなかったが、事例1においても、母親との葛藤が少なからず影響を与えていることが示唆されている。彼らは「よい子」としての枠にはめこまれた自分と決別し、「あるがまま」の新しい自分（真実なる自己）へと生まれ変わるために必死にもがいていたものと思われる。

さらに見方を変えると、事例に登場したC1.たちは、登校拒否（不登校）という形で家族のあり方についての問題を、両親をはじめとする家族全体に問いかけている存在とも言える。それは家族という生きる上での基盤が、C1.らの自我形成においていかに重要な意味を持つ存在であるかということの意味している。

またいずれの事例においても、その契機は、学校という集団生活における人間関係に端を発していた。様々な個性をもつ友人との関係、ライバル・先輩後輩の関係をともなう部活動など人間関係の状況のなかでわき起こるC1.たちの緊張や不安の背景には、高い自我関与や自我の脆弱さの存在が深く関連している。

すなわち、登校拒否（不登校）とは、「自ら選んだひきこもり現象の中で、脆弱な自我構造を再体制化しようと、もがき、苦しみつつ、初めての

自己主張『学校に行かない』という意味表現を呈している存在であり、誰よりも『登校しなければならない』という感情のもとに苦悩している存在とも言える(久留ら、1994)。加えて、思春期は「自分の存在とは何か?」という根源的な問いのはじまりの時期でもある。そのことを考えあわせると、登校拒否(不登校)はアイデンティティ確立への第一歩を踏み出そうとしている姿とも言えるのではないだろうか。

したがって親や教師、SCなど子どもたちの成長発達に寄り添い、援助していく者は登校拒否(不登校)という問題行動のみをとらえるのではなく、子どもが、自己実現的な生き方ができるよう(自分自身の生きる意味を取り戻し、本来もつ資質を輝かせながら、再び羽ばたいていけるような)共通した人間哲学をもつことが重要である。

更に、現場において強く感じることは、SCとしての的確な「みため」と「てあて」が、安定した「見通し」(SCの視座)のもとに存在しなくては、真の臨床援助的接近は難しいということである。SC自身が現状にとどまり、狭い土俵で向き合うだけでは、真の臨床援助はなされないと考える。常に目の前にあるC1.に真剣に向き合う中で、SC自身がきづきを深め、C1.から学ばせてもらっているのだという姿勢を忘れず、さらなる自己研修、自己研鑽を通して成長しつづけることがなによりも大切である。そこに、我々SCのあるべき姿へとつながっていく道があると信じている。

#### <参考・引用文献>

- ・学校臨床心理士ワーキンググループ編 2002 スクールカウンセラー学校臨床心理士の活動と専門性財団法人日本臨床心理士資格認定協会
- ・久留一郎・餅原尚子・南利枝 1994 「登校拒否に関する治療心理学的研究(Ⅰ)―家族病理と親子関係のありようをめぐる―」 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 第4巻 p.71～83
- ・久留一郎 2003 発達心理臨床学 北大路書房
- ・村山正治編 2000 現代のエスプリ別冊 臨床心理士によるスクールカウンセラー 実際と展

望 至文堂

- ・村山正治・鶴養美昭編 2002 実践!スクールカウンセリング 金剛出版